

## バッハ「復活祭カンタータ」に寄せて

私たちハルモニーコール第9回演奏会の追加曲目として決まったバッハのカンタータ BWV4「キリストは死の縛めにあった(復活祭カンタータ)」は、筆者(新井)にとって1974年故佐藤功太郎氏指揮のコーロ・ヌオーヴォ第1回演奏会で歌って以来、42年ぶり2回目の演奏になります。実はこのカンタータこそ筆者が初めて生演奏とレコードで聴いたバッハのカンタータで、その体験をきっかけに自らの音楽生活に決定的な影響を与えることになる、合唱を通じてバッハの音楽を演奏する道に入ったのです。そこで今回は個人的な思い出を交えた文章になることをお許し下さい。

1966年に社会人となった私は、高校時代に経験した合唱の魅力が忘れられず、都内のアマチュア合唱団に所属して何回か演奏会にも参加しましたが、そのプログラムは必ずしも私の好みに合うものではなく、3年ほどでそこを辞めてしまいました。

縁あって、それまで耳にしたことのないバッハのカンタータ「キリストは死の虜となり給う」とフォーレの「レクイエム」という、ちょっと変わったプログラムの「コーロ・ポリフォニコ」第4回演奏会を、東京の杉並公会堂で聴いたのはたしか1970年の秋であったと思います。選曲の謎はすぐ解けました。団員が少なく財政基盤が弱い新興の合唱団にとって大きな出費となるソリストの出演料が、この2曲ならバス歌手一人分で済むからなのですね(笑)。指揮は故濱田徳昭氏(ご子息の芳道氏がリコーダー、ツィンクの奏者、古楽集団アントネッロの主宰者として活躍中です)、合唱のテノールはわずか4人(今のハルモニーコールと同じ)、全員でも30数人という小ぶりな合唱団でした。このグループは濱田氏が指導していた武蔵野音楽大学教育学科のOGと早稲田大学グリークラブのOBが同氏の呼びかけで結成した合唱団で、メンバーのほとんどが20代の若者でした。

この演奏会で初めて耳にするカンタータ BWV4「キリストは死の縛めにあった」には強い感銘を受けました。冒頭の弦楽による短いシンフォニアは胸をえぐるような悲哀に満ちた導入部、それに続くコーラルの第1節はソプラノに定旋律をおき、下3声は模倣様式で進む典型的なコーラル合唱曲です。各声部にトランペットとトロンボーンがユニゾンで加わり、ほの暗く古風で神秘的な響きと4声による切迫した模倣様式の音楽が「抑制された熱狂」とも言うべき雰囲気醸しています。

クリスマスに演奏されることの多い「メサイア」を初めて聴いたときもそうでしたが、復活祭用の音楽として想像していた、晴れやかで喜びに満ちた雰囲気とは全く違う音楽が始まったとき、一種の衝撃を受けたものでした。しかし私はこの曲に深く心を打たれてバッハのカンタータに大きな関心を持つようになり、同時に自分もバッハの作品を歌うことができれば、と強く思いました。そして終演後、この演奏会に誘ってくれた知人の紹介で楽屋の濱田氏を訪問し、同氏から「是非歌いにいらっしやい」とお誘いを頂いたのが、今に続くバッハ演奏経験の始まりだったのです。

演奏会の後、私はさっそく復活祭カンタータのレコードを探しました。当時この曲のレコードで国内発売されていたのは、カール・リヒター指揮するミュンヘン・バッハ合唱団、クルト・トーマス指揮ライブツィヒ聖トーマス教会聖歌隊、ヴィルヘルム・エーマン指揮ヴェストファーレン聖歌隊など数種で、今日の古楽による演奏スタイルを形作ったニコラウス・アーノンクール指揮のウィーン少年合

唱団の演奏は1969年暮から70年春にかけて録音され、日本で発売されたのは72年でした。

私が選んだのはK.トーマス盤で、その理由はまずリヒター盤(ドイツ・アルヒーフ輸入盤)が高価であったからです。勿論かつてバッハがトーマス教会の聖歌隊のカントール(音楽監督)を勤めていたことは知っていて、バッハゆかりの団体による演奏に興味を引かれたことも事実です。

クルト・トーマスは戦前から戦後にかけてトーマス教会のカントールを勤めたギュンター・ラミーンの後任として1967年、第28代トーマスカントールに就任しましたが、ライプツィヒ市があった当時のドイツ民主共和国(東独)の社会主義政策に反対して、1970年西ドイツに亡命してしまいました。しかしカントール在任中のわずか3年間にトーマスはバッハのいくつかのカンタータを録音し、「バッハ教会カンタータ選集」と銘打ってエンジェルレーベルで発売されていました。私が購入したのはその第二巻です。ちなみに亡命後のトーマスは、オーボエ奏者ヘルムート・ヴィンシャーマンが1960年に創設したドイツ・バッハゾリステンに通奏低音(チェンバロ)奏者として参加し、同団体の初来日公演にも参加しています。このときのバッハゾリステンには、フルート奏者として後にミュンヘン・プロアルテアンサンブルを組織したクルト・レーデルもメンバーとして加わっていたそうですから、今から思えば大変豪華な顔ぶれでした。亡命と言えリヒターも、戦後聖トーマス教会のオルガニストとしてラミーンの許で通奏低音奏者を務めていましたが、後のトーマスと同じ理由で西独に移り、ミュンヘン・バッハ合唱団を結成しました。その後の偉業は皆様ご存知の通りです。

さて、購入したトーマス盤は、私の心を強くつかんで離しませんでした。ラミーンや弟子のリヒター、更にもその影響を受けた濱田らの極端に遅いテンポではなく、きびきびとした運びの中に一種の緊張感をはらんだ演奏は、初めて耳にする少年合唱の無垢な声とつやのある弦楽器、初期バロック音楽で多用された古楽器を思わせるややくぐもった金管楽器が一体となって、録音場所である聖トーマス教会の空気と空間を感じさせ、私にとって未知の世界をかいま見るような音楽体験でした。そしてこれが私にとっての復活祭カンタータの決定版となったのです。

ソリストは4人、そのうちのテノールは後に第30代カントールとなるハンス=ヨアヒム・ロッチュです。ロッチュは名盤と言われるシュッツの「十字架上の七つの言葉」で二つのテノールパートをペーター・シュライヤーと共演しており、柔らかな美声の持ち主です。トーマスカントールとしては1975年以来4回にわたって訪日し、私は75、77年(名古屋)、90年(横浜)の公演(いずれも「マタイ受難曲」、90年のエヴァンゲリストはシュライヤー。捨身ともいえる演奏が印象的でした)を聴きました。

ロッチュ氏は東西ドイツ統一後、東独時代のシュタージ(秘密警察)との関係を疑われ、1992年にカントールを辞してオーストリアに移り、ザルツブルク・モーツァルテウムで宗教音楽の客員教授を務める傍ら、日本でも当団の古谷様が所属していた東京オラトリオ研究会他を指揮して、バッハやヘンデルの作品を演奏していましたが、惜しくも2013年に死去しました。リヒターも、トーマスも、ロッチュも音楽・宗教と政治の狭間で苦しみ、心ならずもホームグラウンドを去らざるを得なかった悲劇の音楽家でした。ドイツ統一まで東独に留まったシュライヤーや、東独民主革命の立役者と言われた指揮者クルト・マズアさえも、統一後には西側のメディアから政権との関係を取りざたされたほどで、その姿は罪なくして十字架を背負わされたイエス・キリストとダブって見えなくもありません。この辺りの事情はDVD「クラシック音楽と冷戦」に詳しいので、興味のある方はご覧下さい。

はじめにお断りはしましたが、結局今回は私の思い出と思い出を語っただけで、音楽の構成については次号に譲ることになりました。最後までお読み頂いた方にはお礼かたがたお詫び申し上げます。(新井)